鹿児島JICA派遣専門家連絡会会報

NEWS LETTER

No.18
2019.03

Contents

1．鹿児島県JICA派遣専門家連絡会について
2．会員の活動報告
　国際協力30年の総括
3．特集：鹿児島大学における国際的な教育機会
4．平成30年度JICAボランティアセミナーとパネル展
5．第６回市民公開講座
6．学生の国際協力
　In Search of a World of Equal Opportunities
　（トビタテJAPANプログラム）
　私のウガンダ留学（JICA博士型インターンシップ）
　私のケニア留学
　（「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業）
7．平成30年度「連絡会」定期総会報告

パネル展の様子（H24.10.7）

NEWS

会員の活動報告

・「国際協力30年の総括」　会員　志賀　美英

定期総会が開催されました

平成31年１月19日（土）に、天文館ビジョンホールにて、平成30年度鹿児島JICA派遣専門家連絡会の定期総会が、開催されました。

特集：鹿児島大学における国際的な教育機会

鹿児島大学で取り組んでいるグローバルな視野で世界に貢献する人材の育成事業を取り上げました。

インドネシアのスリウィジャヤ大学に留学した鹿大女子学生

学生の国際交流

MIADの所長Wanjogu博士（右）と助手のK.K. Vincent助手

お世話になった圃場のリーダーとの写真

鹿児島県JICA（ジャイカ）派遣専門家連絡会について

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会長
嶽崎　俊郎
Toshiro TAKEZAKI

JICA派遣専門家とは、開発途上国のニーズに応じた専門技術や知識を持つ専門家として、JICA（独立行政法人国際協力機構）の技術協力プロジェクトに派遣され、開発途上国の最前線で活躍した人たちです。相手国技術者（カウンターパート）にさまざまな技術・知識を伝えることで相手国の技術水準の向上を図り、その国の開発に貢献してきました。

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会は、鹿児島県に在住のJICA派遣専門家（OB）のネットワーク（連絡会）です。2018年12月現在、約80名の方が会員になっています。私たちJICA派遣専門家経験者は国際協力の理解者として、また、政府開発援助（ODA）の現場の体験者として、帰国後も地域におけるさまざまな活動に取り組み、国際協力・交流の促進に貢献しています。

会員活動報告

「国際協力30年の総括」

会員
志賀 美英
Yoshihide SHIGA

活動１　専門家等

・昭和60年３月　長期派遣専門家（チリ共和国、指導科目鉱床学、昭和61年８月まで）
・平成４年４月　鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会員（現在に至る）
・平成８年４月　長期派遣専門家（中国、平成９年４月まで）
・平成10年７月～平成13年8月　短期派遣専門家（中国、合計５回）
・平成20年４月　鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会長（平成24年３月まで）

活動２　鹿児島大学における「国際協力論」開講30年

(1)　開講の経緯

昭和60年３月、妻・娘（１歳半）同伴でチリのコンセプション大学に赴任。滞在中、現地の人々の生活ぶり・価値観及び彼らを育んだ社会環境・自然環境等に接し、日本にいてはできない様々な体験をすることができた。毎日が初めてであり、新鮮であった。帰国後の約２年間、鹿児島大学における講義の一部を割いて、チリ共和国の現状、日本への経済協力要請の社会的背景、技術協力の経験談等を学生に紹介したところ、毎回大きな反響があった。そこで、正規の講義を開講しようと、JICA九州支部支部長笹野暉樹氏（後に設立される九州国際センター初代所長）を訪問し、協力を要請し快諾を得た。昭和63年後期に第１年目の講義（全15回）を開講することができた。この授業は平成30年度の開講を最後に閉じることとなっている。

(2)　担当者・受講者数

授業は九州国際センターの歴代所長、青年海外協力隊の事務局長、本会会員、鹿児島大学の教官等が分担して行った。受講者数は年度により変動したが、平均して年150人程と比較的多く（150人×30年＝4,500人）、女子学生が受講者の約半

数を占めた。

活動３　研究活動

(1)　著　書

・『鉱物資源論』(九州大学出版会、2003年３月発行)
・『開発教育序論』（共著）（九州大学出版会、2008年５月発行）
・『続 鉱物資源論』（九州大学出版会、印刷中）

(2)　主な論文

〈チリ関係〉

・Y. Shiga, J. Frutos, G. Alfaro and S. Espinoza (1988)「Some iron ore deposits in northern Chile」, V Congreso Geol. Chileno, Tomo 3, pp.G113 ～ G128.
・J. Frutos, J. Oyarzun, Y. Shiga and G. Alfaro (1990)「The El Laco Magnetite Lava Flow Deposits, Northern Chile: An Up-To-Date Review and New Data」*in*『Stratabound Ore Deposits in the Andes』edited by L. Fontbote, G. C. Amstutz, M. Cardozo, E. Cedilloand J. Frutos, Springer-Verlag Berlin Heidelberg, pp.681 ～ 690.

〈中国関係〉

・志賀美英，笹野暉樹（1990）「国際協力の現状と将来－鹿児島大学における一講義から」，浦島幸世教授退官記念論集，pp.323 ～ 331.
・志賀美英（2000）「中国の鉱業に見られるいくつかの問題と日本の対中国技術協力の方向－日本の「鉱害」問題を教訓として」，国際協力研究，第16巻，２号，pp.57 ～ 65.
・志賀美英，納　篤（2000）「中国の鉱物資源需給と輸出入形態」，資源地質，第50巻，２号，pp.105 ～ 114.
・L. J. Wang, H. Shimazaki and Y. Shiga (2001)「Skarns and genesis of the Huanggang Fe-Sn deposit, Inner Mongolia, China」, Resource Geology, Vol. 51, No.4, pp.359 ～ 376.

活動４　新聞報道等

・南日本新聞　1998年９月８日付
　見出し：「技術を伝える」鹿児島の国際協力専門家リポート　中国・鉱物資源㊤
・南日本新聞　1998年９月12日付
　見出し：同上㊦
・南日本新聞　2001年10月25日付
　見出し：海外協力隊の事務局長講演　鹿大で講座
・南日本新聞　2009年10月４日付
　見出し：海外支援活動パネルで紹介　JICAの事業
・朝日新聞　　2009年10月４日付
　見出し：海外協力隊のパネル30枚展示
・テレビのニュース

活動５　鉱石の展示・貸出

チリ及び中国で採取した鉄鉱石や銅鉱石、鉛・亜鉛鉱石、錫鉱石等を帰国後市民に公開したり、地元の学校に教材用として貸し出す活動を行っている。

・平成21 ～ 25年度
　国際協力パネル展で展示（10月の第１土･日）
・平成22年度～現在
　鹿児島県立博物館、鹿児島市立科学館、谷山サザンホール、鹿児島大学附属中央図書館、鹿児島大学大学祭、地域の校区文化祭等において展示会開催
・平成26年７月～現在
　地元の中学校、高校等に教材用として貸出

国際協力30年の総括

Ⅰ　人生を変えたチリでの経験

私の本来の専門は鉱床学（鉱物資源成因論）。チリ北部でカウンターパートらと鉄鉱床の調査を行い、５つほどの鉱山を訪問したときである。行く先々で鉱山の技術者と雑談をする。技術者から、自分は日本の金属鉱業事業団に行ったことがあるとか、この鉱山の鉄鉱石は日本に輸出されているなどの話が出るのである。確かに、日本で身の回りを見渡すと、金属製品が溢れ、今日の便利な生活は外国から輸入した鉱物資源によって支えられていることを実感する。私は次第に日本の鉱業政策や鉱物資源の貿易制度に関心を持つようになり、機会があれば文系に移り資源経済学の研究をしたいと思うようになった。

移動のチャンスは数年後に到来した。教養部改組である。この機会を逸しては後々後悔するとばかり、「第一志望法文学部経済情報学科、第二志

望なし、第三志望なし」と提出した。理系から文系への移籍は私ひとりであった。

この移籍は大成功だった。経済情報学科は居心地がよかった。誰に影響されることもなく、伸び伸びと研究を行うことができ、上記のような教育研究実績もあげることができた。著書の『鉱物資源論』と『続 鉱物資源論』には、開発途上国の環境汚染問題、開発途上国に対する技術協力・資金協力、鉱業分野の海外投資などJICA専門家の経験が随所に活かされている。『鉱物資源論』の表紙には、自ら現場で撮影したチュキカマタ銅鉱山（チリ）の露天掘りの写真を使用している。チリでの経験なくしてこのような本を書くことはできなかったことは明らかである。今日の自分があるのは真にJICAのおかげである。

2　最も忙しかったのは本会会長の時だった

この30年で最も忙しかったのは本会の会長を務めた時だった（2期4年）。会員の関心が年々低下していたので、いかにして会員の関心を呼び戻すか、を第一の任務と考えた。

実施したこと（例）

(1)　シニア海外ボランテイアの募集案内を機関誌に掲載

会員としてのメリットがなければ、会費が無料とは言え、会から離れていく。関心のある会員がいるかも知れないと、機関誌「ニューズレター」にシニア海外ボランテイアの募集案内を掲載した。

(2)　国際協力パネル展の開催

派遣先での専門家や青年海外協力隊隊員の活動を写真等で市民に紹介した。多くの会員に展示に参加するよう促した。展示者は当日パネルの近くに待機し、市民の質問等に答えるようにした。現地人の服装、民芸品等も展示するようなった。私はチリや中国で採取した鉱石を展示した。鹿児島県随一の繁華街「天文館ぴらもーる」通りで協力隊OB等の応援を得て笛や太鼓でガンガンやった(写真)。テレビや新聞の取材が多く、記者やカメラマンに対応したのは主にJICAデスク鹿児島の職員だった。平成23年度に本会結成20周年記念事業として実施したときには九州国際センターの所長や課長も激励に来鹿した。

(3)　九州他県の専門家連絡会会長の招聘

総会の来賓として九州他県の専門家連絡会会長を招き、講演をしてもらった。他県ではどのような活動をしているのか、参考になる活動はないか、どのような心配を抱えているか、鹿児島と共同で何かできないか、などを探るためであった。どこも同じような悩みを抱えていることが分かった。

(4)　幹事の役割分担の明確化

4名の幹事の役割を次のように明確にした。

・会計担当幹事：予算書・決算書作成、領収書の管理等
・経験活用担当幹事：活動企画立案、広報活動等
・ニューズレター担当幹事：執筆依頼状、原稿受付、機関誌の構成、校正等
・総会担当幹事幹事：総会案内状、議事録作成、総会時の司会等

役員会は頻繁に開催することにした。役員会では毎回各幹事から進捗状況を報告してもらった。

こうして振り返ると、JICAと共に歩んだ30年であった。成長の機会を与えてくれたJICAと活動を支えてくれた会員の皆様に厚く感謝を申し上げる。

テレビのニュース（H22.10.2）

鹿児島大学における国際的な教育機会

ーグローバルな視野で世界に貢献する人材の育成をめざしてー

世界中でグローバル化が加速する中、私達に身近な地域社会も多様な人々との出会いが日常となるグローバル化社会へと変化しています。このグローバル化によって、随所に様々な利点が生まれるとともに新たな課題も生じています。鹿児島大学（鹿大）は、教育目標の１つに「グローバルな視野をもち、国際社会の発展に貢献できる実践的な能力を育む」を掲げ、これら困難な課題に自ら進んで挑戦し、将来鹿児島や日本、世界に貢献できる人材を育成するために、学生の海外派遣、外国人留学生の受入推進、世界に開かれた大学づくりに努めています。本稿ではその概略をご紹介します。

Ⅰ．学生の海外派遣

Ⅰ）進取の精神グローバル人材育成プログラム（Educational Program for Spirit of Enterprise in Global Context）

P-SEGは、全学の学生が様々な在籍段階で選択できる国際的な体験学修を、入学から卒業まで段階的にロードマップとして繋ぎ、学生が継続的な学びによってグローバル人材へと成長することを目的にしています。在学中に国際的な活動にチャレンジして、世界の中で日本や自分を相対的に捉える視点や行動力、問題解決力を身につけるため、海外活動が身近になるよう情報提供や教育・支援を行っています。核となる共通教育科目等の海外研修プログラム「P-SEGコア」では、中国、台湾、ベトナム、ブラジル、イラン、タイ、ミャンマー、シンガポール、米国の研修があり、事前学習を経て参加するこれらの海外研修の後には、海外研修報告会の他、次のステップのための事後学習科目「グローバルイニシアチブ概論」が用意されています。続く専門の各課程でも、専門的な学びを深める優れた海外研修科目が提供されています。また、共通教育及び専門課程の海外研修科目履修者には、「鹿児島大学学生海外研修支援事業」から支援金が給付されています。

２）大学を通じて応募する留学制度

以下は、鹿大を通して応募し、一定の条件を満たせば返済不要の給付型奨学金が得られる留学制度です。

・学術交流協定校派遣留学

「学生交流の覚書」を締結している学術交流協定校への交換留学（派遣先大学授業料不徴収、鹿大授業料を納付）で、平成30年11月現在、全学生が留学可能な大学が75校（全学間協定）、協定該当学部の学生のみ留学可能な大学が39校（部局間協定）あります。「鹿児島大学学生海外留学支援事業」支援金の他、日本学生支援機構の給付型奨学金も得られる可能性があります。（留学期間：１学期～１年）

・トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム[1]

世界で活躍できる人材育成を目的として、文部科学省が支援企業等の寄附により提供する給付型奨学金です。自分で組み立てた留学計画（大学機関等での座学だけでなく、インターンシップ・ボランティア等の実践活動を含む）に基づいて活動します。鹿大から申込み、第９期までに46名の鹿大生がトビタちました。（留学期間：28日以上２年以内。３ヶ月以上推奨）

・鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣）[2]

鹿児島地域への貢献、活性化に繋がるテーマを持つ海外活動（実践活動も含む）及び地域活性化に寄与する帰国後の活動を含めた留学を支援します。（留学期間：10週間以上１年未満）

・鹿児島県清華大学留学支援奨学金

清華大学人文学院対外漢語教学センターで中国語を学ぶ鹿児島県奨学金で、鹿大から申込みます。

習近平国家主席等の政財界要人を多数輩出した中国トップの総合大学で、世界中から集まる優秀な学生と切磋琢磨して学べ、「鹿児島大学学生海外留学支援事業」支援金も給付します。(留学期間:約5ヶ月間、9月～1月末)

・鹿児島大学UCL稲盛留学生

「21世紀版薩摩藩英国留学生派遣事業」として、2019年秋学期に第1期生が留学を開始します。英国の名門校University College London (UCL) の修士課程で、世界中から集まる優秀な学生と切磋琢磨しながら1年間学ぶ留学です(年間1～2名を派遣)。鹿大工学部の卒業生で京セラ名誉会長の稲盛和夫氏からの寄附金を財源として、学費、航空運賃、滞在費など、1名あたり約1千万円を奨学金として給付します。

・鹿児島大学学生海外学会発表支援事業

寄附金によって本制度を設け、海外で開催される国際学会での大学院生の発表を積極的に支援し、航空運賃などを給付しています。

2. 外国人留学生の受入推進

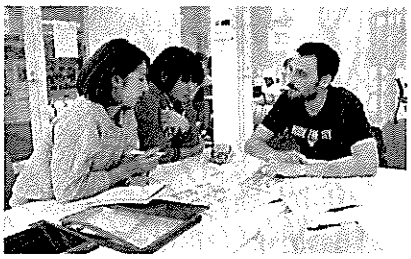
平成30年度現在、鹿大には35カ国・地域325名の外国人留学生が在籍しています。中でも、農水連携国際食料資源学特別コースは、文部科学省による国費留学生特別プログラムに採択され、主にベトナムからの学部正規留学生の受入を行っています。また、グローバルセンターの日本語・日本文化学修コースStudy Japan Programでは、延べ900名近い外国人留学生が日本語・日本文化授業を履修しています。さらに、鹿大では、日本学生支援機構主催の海外で開催される日本留学フェア等、国内外の複数の留学生向け説明会に毎年参加するなど留学生誘致に力を入れており、鹿大「進取の精神」支援基金留学生受入推進事業[2]によって給付型奨学金を設け、学術交流協定校からの留学生を戦略的に招致しています。加えて、より多くの外国人留学生に鹿大の教育機会を提供できるよう、現在大学院において英語で学位取得ができるコースの設置にも取組んでいます。

3. 世界に開かれた大学づくり

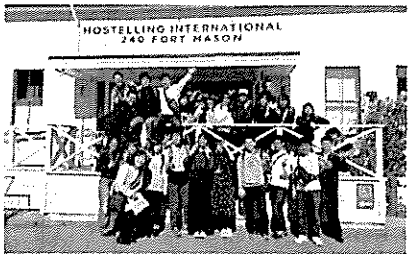
鹿大は、文部科学省の平成30年度「大学の世界展開力強化事業」に採択されました(事業年度:平成30～34年度)。この事業は、オンライン国際協働学習(COIL)により主に米国との学生交流を目指すものですが、鹿大は米国、アジアとの三極連携プログラムを構想しています。事業の効果として、今後鹿大の教育における国際開放性・国際通用性をさらに高めることが計画、期待されています。

現状でも、学内において外国人留学生と日本人学生の交流を積極的に促す活動、および双方に利のある協働学習によって、世界に開かれた大学への歩みを進めており、具体的には、Global Language Space(グロスペ)を設けて外国語グループ学習活動や外国語ランチタイムテーブル、留学帰国生報告会を実施し、留学生や様々な専門・在籍段階の学生が互いに学び合うメリットを活用する「グローバル人材育成郷中教育」を目指しています。また、平成30年度に開始した地域人材育成プラットフォームのグローバル教育プログラムでも、同様の協働学習を行っています。

鹿大は、世界の若者を教育対象とする、世界に開かれた大学を目指しています。社会の将来を担う鹿大生が、既存の支援制度も有効に活用し、種々の国際的教育機会を通して新たな知見と視野、行動力を得て、個性豊かに活躍することを願っています。



グロスペ外国語



学生海外研修(カリフォルニア研修)

派遣留学

参考URL

1. http://www.tobitate.mext.go.jp/index.html
2. http://www8360uf.sakura.ne.jp/shinshu/abroad_dispatch/long_term/

平成30年度JICAボランティアセミナーとパネル展

JICA青年海外協力隊　体験談＆写真展in鹿児島大学
（鹿児島県JICA派遣専門家連絡会・JICAデスク鹿児島　共催）

2018年10月12日（金）、鹿児島大学郡元キャンパス学習交流プラザにおいて、JICAボランティアセミナーを実施しました。学生ならびに関係者をあわせて15名が参加し、JICA海外協力隊の概要説明およびJICA青年海外協力隊の活動紹介を行いました。

今年度は、鹿児島大学大学院出身で2018年３月に帰国したばかりの桐野智美氏に、「協力隊って何ができるの？～灼熱のガーナの２年間～」をテーマに、青年海外協力隊の活動経験をお話頂きました。

現地では、栄養士として国連世界食糧計画（WFP）ガーナ事務所に配属され、ガーナ人だけではなく様々な出身国を持つ同僚たちと活動することが言葉や習慣などの面でも刺激になったと生き生きと話す姿が、参加者にとっても大変刺激的で、有意義な時間になったのではないでしょうか。その他、職種の異なる隊員と協力して行った活動や現地での食生活などについて画像を使って紹介しながら、協力隊に何が出来るか？ということについて、お話頂きました。

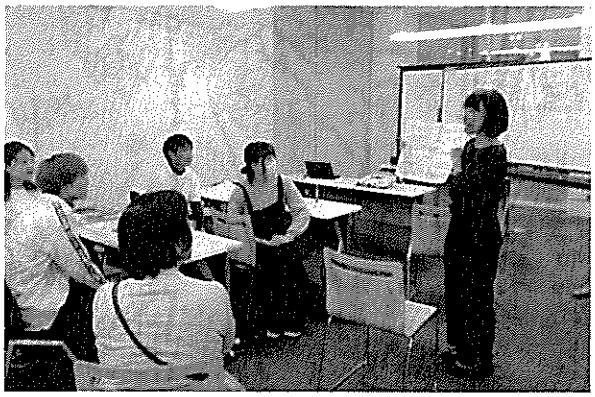
セミナーの参加者からは、「現場経験のある方からとても貴重なお話を聞くことができた」「もとより関心があったがもっと行きたくなった」など、嬉しいご意見を頂きました。

またセミナー後、２週間にわたり学習交流プラザと桜ケ丘キャンパス桜ケ丘会館（生協）にて国際協力写真展も実施し、県出身者による国際協力の活動を紹介しました。

1965年の青年海外協力隊発足以来、鹿児島県から900名を超える方々がJICA海外協力隊へ参加しています。このような場は、帰国後の隊員にとっても自身の活動や経験を活かす良い機会となっています。

（JICAデスク鹿児島　国際協力推進員　外西朋子）

セミナーチラシ



セミナーの様子

第6回市民公開講座

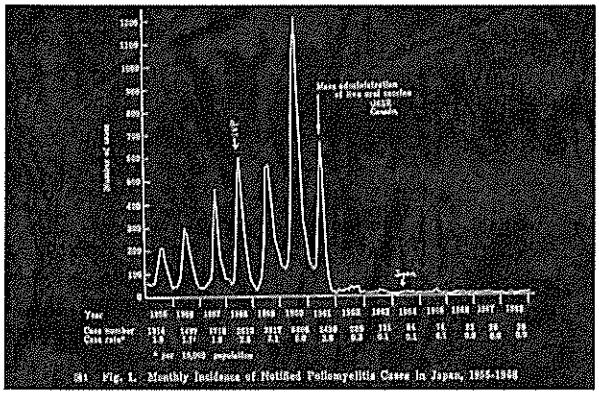
「中国でのポリオウイルス撲滅、そして南米のHTLV-Iを探して」

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科国際離島医療学
鹿児島県JICA派遣専門家連絡会　会長
嶽崎　俊郎
Toshiro TAKEZAKI

Ⅰ．中国でのポリオウイルス撲滅

ポリオ（一般に小児麻痺）は、主に小児における感染症で、多くは無症状、もしくは風邪や胃腸炎の症状で終わりますが、100人から200人に１人の割合で、手足、特に片側の足に弛緩性麻痺（だらんと力が無くなる麻痺）が生じます。多くは大人になっても麻痺は治らず、麻痺した足は矯正しないと変形していきます。

ポリオはワクチンで予防できます。しかし、まだ、十分にワクチンが行き渡っていなかった1960年の日本でも大流行が起こりました。5,000人以上の子供達がポリオにかかり、時の厚生大臣の英断で、ロシアとカナダからワクチンを人道的に緊急輸入し、やっと流行が収束した歴史があります（図１）。当時、５歳だった私も、母に連れられて鹿児島市の中央保健所で、長い行例に並んで、怖い思いをしながら、スプーンでポリオワクチンのシロップを飲んだ記憶があります。これが日本におけるポリオ対策における最初のマス・キャンペーン（ワクチンの接種歴にかかわらず、一定の年齢以下の全ての子供にワクチンを与える対策方法）であったことを理解したのは、1990年のJICA「ポリオ対策」研修コースに参加した30年後でした。



図Ⅰ．日本でのポリオの流行

国連の組織である世界保健機構（WHO）の活動の１つに、感染症の撲滅があります。感染症の撲滅ができると、感染症で亡くなったり苦しんだりする人々、特に多くの子供達を救うことができるとともに、その感染症のワクチン接種を含めた対策を中止することができます。しかし、実際には非常に難しく、これまでに成功したのは、唯一、「天然痘」のみです。ポリオは1988年に、この困難な撲滅のターゲットに選ばれ、世界中でポリオ対策の強化が始まりました。日本では、すでに1980年にポリオは撲滅されていましたが、まだ、世界では流行が続いていたので、ワクチン接種は続けられていました。JICAは、アジアにおけるポリオ撲滅に貢献するために、「ポリオ対策プロジェクト」を立ち上げようと計画しました。そのためには、ポリオ対策の専門家が必要で、1989年から日本人も含めたアジアの専門家を育成するための「ポリオ対策」研修コースが始まりました。

私は、熊本で行われた研修コースの第２期生として、６週間の研修を受けました。研修のコースリーダーは、WHOの天然痘撲滅に大きな功績を残した蟻田功先生で、確固たる信念を持った蟻田先生から教えを請えたことは大きな喜びでありました。このコースには日本人４名、アジア諸国から４名が参加し、日本人には、このコースの半年後にフィリピンとインドネシアでの海外研修もありました。この第2期研修には、この後のポリオ対策に貢献することになる、鹿児島県JICA派遣専門家連絡会の会員でもある帖佐理子先生（国内）と帖佐徹先生（海外）も参加されていました。研修対象に日本人が含まれた理由は、日本の医師、特に若い医師は、既に実際のポリオを知らない世代になっていたためです。

その後、派遣前の異文化学習や語学の研修を受

けて、1991年に中国に長期専門家として派遣されました。当時の中国には、まだ、ポリオの流行があり、多くの子供達や家族が苦しんでいました。まず、モデル地域として黄河が流れる山東省に活動の拠点が置かれました。モデル地域といっても、人口は8,000万人あり、内陸の貧しい農村地域に多くの患者が発生していました。当時も定期的な予防接種は、糖丸と呼ばれる甘い丸を飲ませる方法で行われ、それなりの接種率は報告されていましたが、不十分な報告制度と、農村地域の戸籍未登録児の影響で十分にカバーされていませんでした。農村では貴重な働き手として多くの子供を望み、実際に生んでいましたが、一人っ子政策により、２人目以上の子供が見付かると年収以上の罰金が科せられます。そのため、子供が生まれたことを隠し、戸籍未登録児になっていました。

JICAのプロジェクトでは、２つの戦術を国レベルと現地のスタッフと一緒に推進しながら、保健医療スタッフを育成し、技術移転を行いました。１つめは、患者の登録制度（サーベイランス）の整備と定期的なワクチン接種の推進です。月に２回ずつ、定期的にポリオが流行している内陸の貧しい農村地域にJICAが供与した四駆で患者調査に行き、疑わしい患者の診察（図２）や便検体の採取指導、ワクチンの定期接種の調査や指導を省のポリオ担当スタッフと行いました。朝早く出かけ、５～６時間かけて着いたら、地域責任者らとまず宴会、一休みしてから、患者調査、指導・打合せ、そして夜の宴会というのが当時の中国スタイルでした。体力、気力とともに胃腸の強さも求められる調査でしたが、まだ若かった私は結構、大丈夫というより楽しみながら続けていたように思います。

もう一つの戦術は、日本でも行われたマス・キャンペーンです。これには多くの人材と予算が必要ですが、中国中央政府や省政府も理解を示し、ポリオ対策に大きな効果をもたらしました。

図２．山東省での患者調査

私は1992年に帰国し、私の担当は次の専門家に引き継がれましたが、もう１人の専門家であった千葉靖夫リーダーは長期に渡り滞在し、帰国後も複数回、派遣され、中心的な役割を果たし続けました。モデル地域の山東省での対策は成功し、他の省、国全体にも広げられ、遂に2000年に中国でポリオが撲滅されました。このポリオ対策プロジェクトは、JICAによる感染症対策の成功例として、高く評価されることになります。

私はポリオ対策に携わる中で、予防により興味を持つようになり、帰国後にがん予防を研究する愛知県がんセンター研究所疫学部に移動し、疫学研究に本格的に取り組むことになります。その初期に取り組んだテーマの１つがHTLV-Iでした。

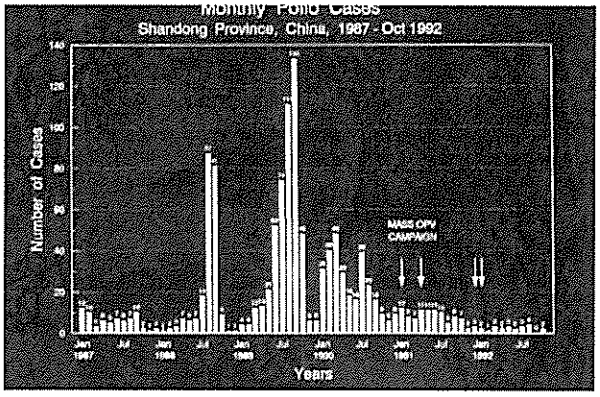


図３．山東省でのマス・キャンペーン

２．南米のHTLV-Iを探して

成人T細胞白血病ウイルス（HTLV-I）は、その名の通り、白血病を起こす原因ウイルスで、他にもHTLV-I関連脊髄症（HAM）や眼のぶどう膜炎（HU）をおこすウイルスです。HTLV-Iに感染したら、全て病気をおこすわけではなく、白血病を起こすのは一生を通じて５％以下です。一方で、感染者数は多く、日本には100万人程もいます。感染は血液や体液を通じて、その中のリンパ球が体に入ることで起こるため、感染力は強くはありませんが、対策は必要です。具体的には、母乳、輸血、精液を通じて感染し、最も問題になるのは母乳です。というのも、白血病は新生児・乳児期に感染した人から約60年後に起こるためです。そのため、妊婦のHTLV-I検査が行われおり、陽性の場合には、感染率を下げるために、人工乳にするか、母乳を３か月程度で止めることが推奨されています。また、日赤では輸血用の全血液に対

しHTLV-Iの検査が行なわれています。

HTLV-Iを持っている人（HTLV-Iキャリア）と成人T細胞白血病患者の分布には大きな地理的特徴があります。九州・沖縄が最も多く、北海道の一部（アイヌ）、山陰・四国・三陸地方の沿岸部に散在しています（図４）。関東・中部・関西の都市部にも分布していますが、多くは九州出身者です。なぜ、この様な分布をしているのか、最も有力な説は、縄文人との関係です。約12,000年前に、縄文人が南と北から日本に移り住んで来ました。約2,300年間には大陸からやってきた弥生人が日本の中心部を占め、縄文人が九州と北海道に残ったことが文化人類学的に知られています。縄文人はHTLV-Iを持ち、弥生人はHTLV-Iを持たず、入ってきても感染しにいことで説明がつきます。

HTLV-Iを持った縄文人達がどのように世界に広がっていったか、文化人類学的かつ医学的に興味あるテーマについて、1990年台に、日本の研究者らが中心になって世界で調査研究が展開されました。

図４．成人T細胞白血病患者の分布

氷河期であった約12,000年には、ユーラシア大陸からアメリカ大陸に陸路で渡ることができました。海路で渡れた可能性もあります。北アメリカの先住民族であるアメリカインディアンもアジア系のモンゴロイドですが、HTLV-Iは持っていないことが解っていました。そのため、私達は南米に焦点を絞りました。

まず、南米の先住民族として有名なヤノマミ族の調査を行いました。ヤノマミ族はオリノコ川上流のベネズエラとブラジルの国境周辺に住んでいる民族で、ジャングルの中で自給自足の生活をしている民族です。アプローチする道路は無いため、ベネズエラ厚生省の協力を得て、軍の飛行機とヘリコプターを乗り継いで、現地入りしました。やっとの思いで、200人以上の血液を採取し（図５）、拠点にしていたコロンビアの大学に持ち帰り、徹夜で検体処理をして日本に持ち帰りましたが、結果は全て陰性。皆で、そう言えば、ヤノマミ族の顔は縄文人系ではなかったよねと後から変な納得をして、気を取り直し、翌年からはボリビアの前インカ文明の民族を探すことになりました。

図５．ヤノマミ族成人からの採血

ボリビアの首都ラパスは標高3,700mの高地にあります。そのため、着いた日の夜から高山病のため、ひどい頭痛とお腹の張りに悩まされ、フィールド調査どころではありません。無理をすると命に関わると脅され、高地順応するまで大人しくラパスで禁酒生活でした。結局、ボリビアには４年連続して調査に行くことになるのですが、いずれも、７泊過ごした翌朝にピタッと頭痛が止みます。高地順応OKとして、フィールド調査に出発です。フィールド調査の成否は、如何に良い共同研究者を得るかにかかっています。郷に入っては郷に従え。ボリビアも中国も、鹿児島県の離島も同じでした。探すだけでなく、相手を尊重して関係性を深めることも大切なことです。

ボリビアでは、川に車がはまり、零下10℃以下の凍った川の車の中で一晩中過ごしたりと、冒険的なところもありましたが、時には高地のフラミンゴや最

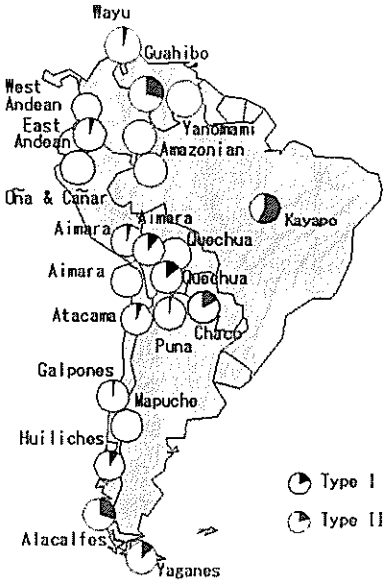
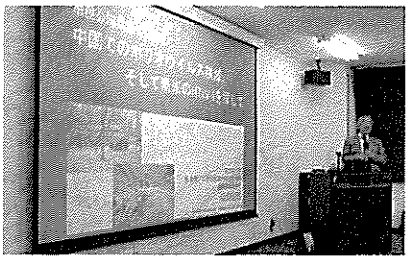


図６．南米のHTLV-IとII

近、脚光を浴びているウユニ湖も見れました。そして、ついにHTLV-Iキャリアを見つけることができました（図6）。さらに、HLAを使った免疫反応の一部に縄文人系日本人と共通する部分や、1,000年以上前のミイラからもHTLV-Iの遺伝子を見つけることもできました。

HTLV-Iを探す旅は、高地繋がりで、チベットやネパールにも広がりましたが、残念ながらHTLV-Iキャリアは見つかりませんでした。チベットに調査に行った時に、現地のスタッフから1人の子供を見てくれと頼まれたことがあります。2歳ほどのその子は、片側の足が麻痺して萎縮しており、真にポリオでした。中国でポリオ撲滅宣言が出された数年後のことです。まだ、ネパールやインドではポリオが流行しており、改めて感染症に国境の壁はないと感じました。その時に、数か月前に日本人医師に診てもらったとも聞きました。最初に思い浮かんだのは、JICAプロジェクトの千葉先生で、国境でのポリオ監視体制を整えるために現地に来た姿が浮かんできました。縁あって、その10数年後に千葉先生に会うことができ、早速、チベットの患者さんのことを聞くと、チベットに行って診たとの答え、不思議な繋がりを感じた一瞬でした。


中国での派遣経験を紹介する嶽崎講師

司会の水上前会長と質疑応答の様子

In Search of a World of Equal Opportunities（トビタテJAPANプログラム）

鹿児島大学医学科２年
安田　友子
Tomoko YASUDA

Initial *Inspirations*

Why are there children who exist struggling to survive to see the sun of tomorrow, and then in the same world, food being thrown away untouched, still edible?

Growing up in developing countries like Tanzania, Vietnam, Thailand, and Myanmar, this undeniable inequality was a reality that constantly both perplexed and perturbed me. As I grew older, my conviction that this was not right strengthened and I started in my hunt for a better world for everyone to live. One of my first realizations was that people first need to be healthy in order to play, study, work...and this led to my decision to focus on human health, and study medicine.

Yet, once I entered medical school in Japan, I realized how little I knew about the actual needs of people living in developing countries. My desire to better understand the lives of these people led me to visit Nepal, one of the poorest countries in the world, in 2017. I fell in love with the beauty of the people people and nature. They were definitely poor, economically, but their hearts had something we had perhaps forgotten in the 'rich' countries, smothered by superfluity. I wanted to go back, and also have more people know Nepal. I applied forトビタテ! a scholarship established by the Japanese government for young ambassadors, and launched a project as part of IFMSA (国際医学生連盟)

to provide opportunities for students to experience and learn about the state of medical care in Nepal, far from imaginable in Japan.

Current Status of *Health* in Nepal

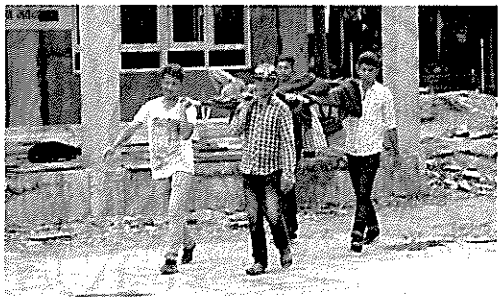
This summer I spent about 6 weeks in Nepal, out of which 2 were spent with seven Japanese students from IFMSA. We spent several days at a rural hospital situated in Rukum, one of the most remote regions of Nepal, and later also visited other health centres, major hospitals in the capital, and even a local witch doctor (祈祷師). The quality of health services provided by the medical doctors in health facilities were not exceptional, but much higher than expected. What stood out as the greater barrier to people receiving proper health care, however, was the lack of access (I encountered a man who had been carried by four men in a stretcher for 5 days to get to the hospital) and the persisting belief in superstitions. For example, the traditional healer was constantly busy, with patients presenting symptoms ranging from psychological to what was most definitely a bone fracture, portraying many people's preference for them over "Western" medicine.

At the rural hospital, located in Rukum.
A woman walks out carrying her son with a broken leg and cast.

In hospitals, infectious diseases were definitely the most prominent; I saw patients diagnosed with leprosy, pertussis, tuberculosis, and severe osteomyelitis all in the same day. In-patients with TB, pneumonia, urinary tract infections, pregnant mothers, and children with bone fractures were all placed in proximal (and openly connected) or even the same wards, due to the lack of beds. Plastic gloves never thrown away: they were were disinfected, dried and reused in masses.

Japan's *Presence* in the Medical Setting

Japan's relationship with Nepal has been friendly over many years, and this was clear from the many hospitals constructed under Japan's ODA including the largest Teaching Hospital in the country (TU) and Kanti Children's Hospital. Most Nepalese held very positive opinions about Japanese people, regarding them as hard working and modest (which apparently were traits written in textbooks and taught at school as an integrational part of their social and world studies).

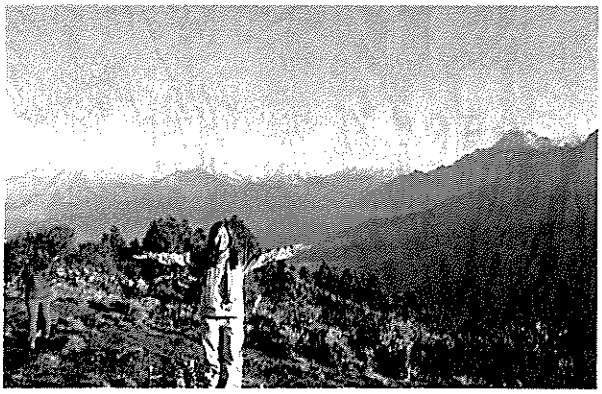


The man arrived in a stretcher, half delirious, carried by four men who had walked for 5 days to arrive to the hospital.

Comments and Future *Dreams*

If there is one thing I've learnt through my experiences, seeing and immersing in different societies and values, it's that there

is no one culture superior to all others. I don't think there is a 'perfect' structure to how a society should be; not all countries have to aim to achieve the Western concept of 'development'. We don't have to aim to be all equal, the same. Yet, what everyone does deserve is an equal opportunity to fulfill their fullest potential, to bloom as a unique flower. Right now, in this world, great disparities exist. My search in life, is for a world where everyone has the equal individual opportunity to fulfill their fullest potential.



Nepal is rich in culture, people, and nature, being home to 8 out of the 10 tallest mountains in the world including Mt. Everest. Above is taken at the Annapurna mountain range.

私のウガンダ留学（JICA博士型インターンシップ）

鹿児島大学大学院連合農学研究科
中尾　祥宏
Yoshihiro NAKAO

アフリカ東部、赤道直下に位置するウガンダ共和国は、１年に２度の雨期があることや、年間を通じて20度前後の気温であることから、大変過ごしやすい気候で、アフリカの真珠、緑の国ウガンダと呼ばれています。

私は2017年６月からの５ヵ月間と2018年７月からの３ヵ月間、合計８ヵ月間、このウガンダ共和国に滞在しました。特に、今年はJICAインターンシップでJICAウガンダ事務所、Promotion of Rice Development Project（以降PRiDeプロジェクト）、およびカウンターパーのウガンダ国立作物資源研究所の皆さんにお世話になりました。

PRiDeプロジェクト では2011年から稲作に関する適正技術の開発と稲作農家への適正技術の普及が行われています。私はこれまで所属大学において、陸稲栽培で問題となっている初期生育についての向上技術の開発に取り組んできました。今回のインターンシップではPRiDeプロジェクトで行われている研究、技術開発、農家への普及という一連の国際協力活動について理解を深めると共に、研究・普及の最前線における現場感覚の研鑽を目的とし活動を行いました。

PRiDeプロジェクトの研究部門ではウガンダに適した基礎栽培技術の研究･開発が行われており、多様な環境に適した栽培技術の検討が行われています。私の活動の中心は自身の日本での研究を現地適応型稲作技術に応用することで、毎日、研究所と実験圃場を往復する生活を送っていました。

一方で、普及分野では実際の農家コミュニティの中において行われているFarmers Field School（FFS）に参加させていただきました。FFSでは農家が実際の圃場でPRiDeの推奨技術を習得します。農家は、半年間かけて農家圃場の近隣に設置されたデモサイトで行われる講習を受けることにより、実感をもって推奨技術を学ぶことができます。また、FFS卒業生はMusomesa（ムソメサ：ウガンダの言葉で先生を意味する）Farmerとして次回のFFSに参加する近隣農家への研修を行います。FFSの様子を体感し、今後の技術普及において、農家コミュニティの奥深くまで技術を浸透させようと活動に取り組む、PRiDeの普及にかける熱量を肌で感じ大変感銘を受けました。

PRiDeのカウンターパートであるウガンダ国立作物資源研究所には５名のJOCVが配属されています。プロジェクトおよびNaCRRIと共同で活動を進めている隊員、農村に入り地域コミュニティで活動する隊員等、職種や活動内容も様々でした。現地の言葉を習得し農民と密接な関係を築いて活動している様子が印象的でした。

本インターンシップにおいて普及と研究の最前線で活動を行うことができ、PRiDeにおける研究・技術開発と農家への普及といった一連の流れを学ぶことができました。そこでは問題解決に直結するような研究・技術開発を行うことが重要であると同時に、普及を見据えた上で農民に伝わりやすい効果的かつ簡易的な技術を開発する必要性があります。現在、世界各地で行われている当該分野の研究について、農家の方々が直面している問題解決にどれほど直接的に寄与し得るかと考えると、強い危機感を感じます。インターンを通じて、“困難であっても農家の利益につながるような研究を行うこと念頭に置き、研究結果がプロジェクトを通じて技術革新や普及に直接的に寄与するような研究課題に取り組んでいきたい”という思いは、より強くなりました。そして、いずれは農学者となり国際協力・開発の分野でも活躍できるような人材になりたいです。

オフィスの仲間たちとの写真

私のケニア留学（「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業）

鹿児島大学熱帯作物学研究室４年
山田　陽菜
Haruna YAMADA

2018年、私は、大学生最後の夏、平成最後の夏の３か月間をケニアで過ごした。６年間目標だったアフリカへの渡航だった。高校１年の秋、通っていた高校でキャリアデザインの授業があった。そこで私は、アフリカの農業の発展のため、現地で技術の普及を行っている卒業生のお話を聞いた。詳しい内容は覚えていないが、発展途上国の人々を助けるために、遠く離れたアフリカで農業を教えている高校の先輩がいることにとても衝撃を受けた。それまで全く海外に興味がなかったが、その日以降、私の夢は先輩のように「アフリカで農業に関わる仕事をすること」になった。大学に入学したら、まずは実際にアフリカに行ってみよう、と考えていた。大学入学後はアジア圏の国に何度か渡航する機会はあったが、どれも２週間ほどの短期研修ばかりで、引率付き、生活水準も比較的高かった。今回のケニア留学はそれらとは全く違った。留学の受け入れ機関が決まってから、受け入れ先と連絡をとろうと何度メールを送っても返信はなく、渡航日が来てしまった。受け入れ機関の正確な場所もわからず、宿泊先も決まらないままの出発となった。

今回の留学の目的は、標高の高いケニアでの稲作の調査だった。稲作農家を回り、圃場調査や穂のサンプリングを行う。収集した穂の調査は、滞在先に持ち帰ってから作業を行った。行うこととしては難しいことはないはずなのだが、アフリカで行う、ということがいかに大変なのかを痛感した。事前に提出していたスケジュール通りに進まない農家訪問、サンプリング予定の圃場に行ってみたら、すべて収穫が終わってしまっていたこともあった。作業をする環境も整っておらず、脱穀もすべて手作業で行った。帰国日までに作業を終わらせるため、休みもなく、深夜までひたすらお米と向き合った。そんな状況でも最後まで頑張れたのは、宿泊先で３か月間お世話をしてくれた寮母さんのおかげだった。食事の準備や部屋の掃除など身の回りの世話だけでなく、気分転換に買い

物に誘ってくれたり、ケニアの食文化や政治の話、ケニアが抱えている教育の問題など、現地の人しか知らないことをたくさん教えてくれた。日本人が誰もおらず、作業が忙しくてオフィスの人たちと会話する暇もない中でも、私のことを気にかけて、作業を手伝ってくれることもあった。もちろん、困ったときに状況を理解して、的確なアドバイスをくださる学校の先生や、ずっと支えて励ましてくれた親や友人の存在も大きかった。正直、ケニア留学は苦労することばかりで、あまりいい思い出にはならなかった。しかし、いい思い出を作りに行くなら、ケニア観光でいいのであって、今となって振り返ってみると、留学の狙いとしては完璧だったと思う。ずっと憧れていたアフリカがどんなところなのか、憧れや夢、目標だけでやっていけるほど、甘くない環境だということもわかった。現時点で、これから自分がアフリカで働くという道に進むのかはわからないが、ケニアでの3か月は、今後の自分にとって貴重な経験であることは間違いない。大変で苦労も多かったが、今回のケニア留学は、出会い、将来を考えること、親や友人など自分のことを支えて励ましてくれる存在に改めて気づけたこと、など素晴らしい機会だった。

苗床の準備

平成30年度「連絡会」定期総会報告

平成30年度「鹿児島県JICA派遣専門家連絡会」

2018年度の鹿児島県JICA派遣専門家連絡会の総会が、2019年1月19日（土）に天文館ビジョンホール4階にて開催された。嶽﨑会長の挨拶に続き、JICA九州センターの植村吏香所長からご挨拶を頂いた。続いて、1）2018年度活動報告、2）会計報告（詳細は後日、書類で報告）、3）2019年度活計画案および同予算案が審議され、議決された。2019年度活計画案として、例年通りの鹿児島大学構内でのボランティアセミナーとパネル展、総会、市民公開講座、会報誌「NEWSLETTER」発行、ホームページでの情報発信を実施することが決められた。さらに、パネル展は他大学にも広げる案が検討され、鹿児島大学の名誉教授が学長をしている志學館大学などを候補として、具体的に検討することになった。また、市民公開講座の講師候補として、長期派遣から帰って来た鹿児島県出身の専門家に活動報告を兼ねた形で、JICA側から依頼する案が提案され、検討して頂くことになった。また、テーマとして、地域のニーズに合わせた火山防災なども提案された。一方で、国際理解教育に関する鹿児島大学での共通教育科目「国際協力論」が今年度で終了すること、イオンモールで行ってきた市民を対象にした「国際協力パネル展～鹿児島と世界をつなぐ人々」は新たに多額の経費が請求されるようになったため、中止せざるを得ないことも報告された。

総会に続いて、第5回目となる市民公開講座が行われた。講師は、本会の会長である嶽﨑俊郎氏（鹿児島大学教授）で、「中国でのポリオウイルス撲滅、そして南米のHTLV-Iを探して」の演題のもと、JIACによる感染症対策プロジェクトの成功例であるポリオ対策と、HTLV-Iウイルスの世界的分布を調査し、日本人が関係するモンゴロイドの民族移動との関係を明らかにした南米でのフィールド調査の経験を紹介した。参加人数は25名程で、医学部の学生3名や、かつて研究に携わっていた医師も参加し、熱心に聴講し、活発な質疑応答が行われた。

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項

（平成15年２月28日）

1．趣　旨

わが国における開発途上国に対する国際協力活動の一層の拡充要請、九州及び鹿児島県における国際交流活動の活発化、国際協力事業への参加志向の高まりが顕著な今日、開発途上国で国際協力活動の第一線に身を置いた共通体験を有する我々は、もてる知識・エネルギー等を結集して、前記の動向の有効な発展に資すると共に、県内の現居住地において我々の体験を活用する方途の具体化を期して、本会をここに結集する。

2．事　業

本会は前項の趣旨の具現を図るため、下記に係わる事業を行う。

(1)政府開発援助（ODA）進展動向に関する調査研究及び提言

(2)JICA及びJICA九州国際センターの業務遂行の方途に関する助言、支援等

(3)鹿児島県と海外諸国（特に開発途上国）との国際交流活動の促進、充実に資する諸活動

(4)会員相互の情報交換・交流・親睦に関すること

3．会　員

本会の趣旨に賛同するJICA派遣専門家経験者。

なお、今後帰国し、当会に入会を希望する専門家は、当会に入会届を提出するものとする。

4．会長及び幹事

(1)会の運営を円滑に行うため、当会に会長１名および世話役として幹事４名を置く。

(2)会長は会務を総括し、会を代表する。

(3)幹事は適宜幹事会を開いて、所要の協議・決定を行い、会員の協力を得て、第２項に定める会務の執行に当る。

(4)会長及び幹事の任期は２年とする。但し、再任は妨げない。

(5)本会に顧問として、JICA九州国際センター所長の職にあるものを充てる。

(6)本会に臨時会計役を定め、所定の会計処理を行う。

5．その他

この申し合わせ事項を改変、もしくは新たに会則を設ける場合、幹事会が原案を策定し、会員の過半数の同意（集会又は郵送による）を得て施行する。

編集後記

2018年度は鹿児島の年でした。「西郷どん」、「明治維新150周年」、「来訪神：仮面・仮装の神々のユネスコ無形文化遺産登録」など、話題が盛りだくさんでした。一方で、台風、豪雨や火山噴火による生活への影響もありました。2020年には鹿児島国体が開催されます。しばらくは鹿児島ブームが続きそうですね。本ニューズレターは、会員のみならず、一般の方々にもぜひ手に取って見ていただきたいと願っています。皆さまからのご意見をお待ちしております。

編集人：坂上　潤一

鹿児島県JICA派遣専門家連絡会会報　第18号
発　行　2019年３月
発行者　鹿児島県JICA派遣専門家連絡会　会長　嶽崎 俊郎
鹿児島県JICA派遣専門家連絡会事務局
〒890-8544　鹿児島市桜ヶ丘８-35- 1
鹿児島大学医歯学総合研究科国際離島医療学内
電　話：099-275-6853　FAX：099-275-6854
E-mail：takezaki@m.kufm.kagoshima-u.ac.jp
担　当：嶽崎俊郎（たけざきとしろう）